

# 「打吹山の天女」伝説について

酒井 董<sup>ただ</sup>美<sup>よし</sup>

Tadayoshi SAKAI : Regarding "The Celestial Maiden Legend of Mt. UTSUBUKI"

倉吉市には羽衣伝説に属する話が知られ、「打吹山の天女」という名前で親しまれている。これは世界的な広がりを持つ昔話「天人女房」譚の伝説化したものであり、「倉吉」「羽衣石」「打吹山」などにかかわる地名由来を説いている。本稿では視点を世界に広げながらこの伝説を分析し、当地方の伝説の持つ特色について述べておきたい。

キーワード：昔話 伝説 地名由来 羽衣伝説 天人女房

## 1. はじめに

鳥取県倉吉市の南に打吹山がある。標高204メートルのすり鉢型で、新生代末期にできたと思われる独立峰であるが、この山の名を冠したいわゆる羽衣伝説が当地ではよく知られている。文献で見れば寛保2年(1742年)松岡布政の『伯耆民談記』にそれが見られ、現在でも多少の変化を示しながら、人々の間で広く語られている。

本稿では、いくつかの資料を紹介し、この伝説の特色と世界の同種の説話との関連について、考察をしようとするものである。

## 2. 打吹山の天女伝説の概要

倉吉市役所が昭和31年10月に出した『倉吉市史』によって、この伝説の概要をまず、把握しておこう。そこには次のような記述がある。

昔、この山の近くに天女が舞い下り、農夫に羽衣をうばわれたので、人間とちぎって二人の子をもうけた。天女は、後に子をあざむき、羽衣をさがしだ

して、山麓の神坂の井戸のほりからふたたび昇天した。二人の子供は大いに悲しみ、天女が、音楽を好んでいたところから、この山上で、鐘を打ち笛を吹いて奏楽をした。このいわれから打吹山とよばれるようになった。

神坂の井というのは、賀茂神社の坂下にある。井戸のそばに夕顔が咲いていた。天女は、このつるをつたって昇天したというので、今にその井戸を「夕顔の井戸」とよぶ。

天女が羽衣をほした羽衣石は、大岳院境内にあり、衣羽池の跡もそのあたりにあったという。

これによると、「打吹山」の項に「この山の近くに天女が舞い下り、農夫に羽衣をうばわれたので」とあるばかりなので、天女が何の目的でどこへ降りてきたのかがはっきりしない。ただ、天女が隠されていた羽衣を見つけて天に帰ったくだけりから、打吹山と呼ばれたとする山の名称や、夕顔の井戸と命名された由来だけは述べられている。この『倉吉市史』の記述の資料になったのは、江戸時代の松岡布政の著した『伯耆民談記』寛保2年(1742)によるものと推定されるが、煩雑を避けるためその記述は、参考として別に記しておいた。

ところで、別な口承資料を知ることによって、天女の降りてきた目的や他の地名由来について、今少し詳しく知ることが出来る。関金町大鳥居で収録された話では、天女が東郷池に水浴びに来て、羽衣を脱いだところを舎人という獵師に盗まれたと説明され、更に地名由来として外道山（山の名称）、羽衣石（集落名）、倉吉（地名）についても述べられている。これについては、昭和47年に稲田和子山陽学園短期大学講師（当時）によって編まれた『鳥取県関金町の昔話』（山陽学園短期大学昔話同好会）から、引用しておく。語り手は倉吉市関金町大鳥居の光村吉司氏（明治39年生）である。

この話は、鳥取県の倉吉市字、耳という部落に、耳の六兵衛さんと言う、語り手がありました。その話を、次から次へと、伝説に受け継いで、聞いていたのを、光村が聞いておるのであります。その話をいたします。耳と言う部落は、からだの一部である耳と言う字を書くのであります。大変おかしいような部落の名前ではございますが、これは、語り手の耳によって聞いたことを次の時代に伝える人のことを耳と言っております。その部落の六兵衛さんの話なんです。

さて、話は、本題に入りますが、鳥取県の、現在、東郷町になっておりますが、そのこのところは、以前はそう言う部落名もなく、ただ漠然と、伯耆の中ほどに、大きな湖がありました。そこに舎人とねりという大変力の強い、獵人がおりました。この獵人は、山のものを取ったり、海のものを取ったりしてたづきを営んでおりました。ふとある日、その大きな湖に出て獵をしようと思って見ていると、そこに美しい、美しい天人が、水浴びをしていたのです。で、その舎人と言う獵師は、こんな美人が自分の妻になったならあというような野心をおこして、水浴びをしている天人のそばに、そろりそろりと足音をしのばせて寄って行って、そこに脱いであった羽衣を、とって自分の小脇にかかえて、天人の上がってくるのを待っていました。そうすると、やがて天人

は上がって来て、羽衣を着ようとしても、そのへんにはありません。見ると、舎人の脇の下にかかえられているので「その羽衣を返してください。返してください」いくら頼んでも、舎人は自分の妻にしようと思っているので、返してくれませんでした。やむを得ないので、とうとう舎人の言うことを聞いて、そのうちの妻になりました。舎人はその天人を呼ぶのに、自分の家内を、「天人や、天人や」という訳にはまいりません。そこで浅い津の所で見つけたのでありますから、浅津と言う名前を、かりにつけました。そして、浅津と舎人の間に、お倉と、お吉きょうだいという二人の姉妹の子をもうけました。

ほうして、ちいさい妹のお吉が、十二、三歳の時であります。ふいっとお父さんが留守の間に「お吉や、お倉や、お前らは、わしがここに来ておるのに、なにか隠しとるということを知らんか。お父さんが、何か隠しとんなさるだないかいな」「いいえ、隠しておんなはらへんと思うけえどなあ」やかましく問いつめておりますうちに、姉さんのお倉の方が「そう言やあ、お父さんは、ちよいちよいと、ふしぎなことがある。どっか行ってしばらく見えんことがある」で、「このせんど、お父さんの後をつけて行って見たら、あしこの大きな山の上に、石があって、石の上の所に、腰をかけて、そして、しばらくしてから、なんか出して見ては喜んで、またそれをしまっておいて、帰んなった」「あ、そうかい、そうかい」というので、子どもをそこに置いていて、天人の浅津は、その大きな石の所に行っただけであります。

その石は、羽衣石と言って、現在でも残っておりますが、その羽衣石は、そのこの部落の名が、うえしと読むのであります。

羽衣石と書いて、うえしと読むのであります。そこで、天人の浅津が、その石の下から羽衣を引き出して、そこに隠してあつ羽衣を、引き出して、それを身にまとって、そうしてしばらく、そこら辺の空を舞って、二、三べんまわる。そうしとるうちに、お倉や、お吉が見つくて「あれ、お母ちゃん、お母

ちゃん」言うて、いくら言っても、天人は見向きもしないで、空へ空へと上がって行くのであります。そのお倉の方は、常日ごろから教えられていた笛を、ひじょうにきつく吹いて、天にも聞こえるようにというので、きつく吹いたのです。そうしてお吉の方は、お父さんがこしらえてくれた、おやわんに、魚のふぐの皮ではった、たいこをたたいて「お母ちゃん、お母ちゃん」と言っ、天人に聞こえるように呼びかけますや、天人は見知らぬ顔をして、次々と西の方へと舞い、それで、お倉とお吉の二人は、その後を追って、ずうっと西の方に、追っかけて行きます。晩方になるようになりました。

そしたら、その大きな山があります。その山の蔭で天人の姿が見えなくなったんです。「あの山がなかったらなあ。お母ちゃんの姿が見えるのになあ。あの山は外道だなあ」それでその山は、外道山になっております。そうして、その山をうかいして、もう少し高い所に上がったら、お母ちゃんの顔が見えるかと思っ、だんだん、だんだん、その大きな山に近づいてそしてその山のとっぺんで、お倉とお吉のふたりが、大きい声して、声のかれる限り、大きな声で呼びました。また笛を耳の裂けるほどきつく吹いて、お母ちゃんを呼びます。お吉の方は、ふぐの皮をはった、たいこを、一生懸命にたたいて呼びましたが、ついにお母ちゃんは帰らんのであります。それで、お母ちゃんは帰らんし、お父ちゃんの所へいまさら帰るわけにもゆかんで、とうとうその里に住みついでしまいました。その里に住みついたところが現在の倉吉市であります。

倉吉と言うのは、お倉の倉と、お吉の吉をとって、倉吉と言う地名になったんです。これは先刻お話ししました、耳の六兵衛さんの、語り手の次の話を、私がひき継いでお話したのであります。その昔こっぼりひいごの巢、あけてみたらいなかのことで土くさかった。

### 3. 『丹後国風土記』逸文のこと

ここで風土記時代に遡って打吹山の天女伝説の類話について見ておきたい。風土記作成の詔は和銅6年(713)に出ており、『出雲国風土記』は天平5年(733)に完成しているから、ほぼ同じ頃にできたと思われる『丹後国の風土記』逸文の中に次の天女伝説が残されている。

丹後の国丹波の郡、郡家の西北の隅の方に比治の里あり。此の里の比治山の頂に井あり。其の名を眞奈井と云ふ。今は既に沼と成れり。此の井に天女八人降り来て水を浴みき。時に老夫婦あり、其の名を和奈佐老夫・和奈佐老婦と云ひき。此の老等、此の井に至りて、窃に天女の一人の衣裳を取り蔵しき。やがて衣裳ある者は皆天に飛び上り、ただ、衣裳なき女娘一人留まりて、即ち身を水に隠して、独り懐愧ち居りき。ここに老夫、天女に謂ひけらく、「吾は児なし。請ふらくは、天女娘、汝、児と為りませ」といひき。(天女、答へて云ひしく、「妾独り人間に留まれり。何ぞ敢へて従はざらむ。請ふらくは衣裳を許したまへ」と。老夫云ひしく、「天女娘、何ぞ欺く心を存ふ」と、天女云ひしく、「凡て天人の志は、信をもちて本となす。何ぞ疑心多くして、衣裳を許さざる」と。老夫答へて云ひしく、「疑ひ多くして信なきは率土の常なり。故、此の心をもちて、許さじとおもひしのみ」と。遂に許して)即ち相副へて宅に往き、即ち相住むこと十餘歳なりき。ここに天女、善く酒を醸し造りき。一杯飲めば、吉く万の病除ゆ。其の一杯の直の財は車に積みて送りき。時に、其の家豊かにして、土形富みき。故、土形の里と云ひき。こは中間より今時に至りて、即ち比治の里と云ふ。後に老夫婦等、天女に謂ひしく、「汝は吾が児にあらず。暫く借に住めるのみ。早く出で去きね」と。ここに、天女、天を仰ぎて哭働き、地に俯して哀吟しみ、すなはち老夫等に謂ひしく、「妾は私意から来つるにあらず。定は老夫等が願へ

るなり。何ぞ厭悪の心を発して、忽ち出で去つる痛しみを存すか」と。老夫、増発瞋りて、去かむこと願めき。天女、涙を流し、微しく門の外に退き、郷人に謂ひしく、「久しく人間に沈みて、天に還ることを得ず。また、親故もなく、居らむ由を知らず。吾、何にせむ、何にせむ」と、涙を拭ひて嗟歎き、天を仰ぎて歌ひしく、

天の原ふり放け見れば霞立ち

家路まどひて行方知らずも

遂に退き去きて、荒塩の村に至りき。即ち村人等に謂ひしく、「老夫・老婦の意を思ふに、我が心、荒塩に異なることなし」と。仍りて比治の里の荒塩の村と云ふ。また、丹波の里の哭木の村に至り、槻の木に拠りて哭きき。故、哭木の村と云ふ。また、竹野の郡船木の里の奈具の村に至りて、即ち村人等に謂ひしく、「ここにして、我が心なぐしく成りぬ」（古事に平善きをば奈具志と云ふ）と。乃ち此の村に留まり居りき。こは、謂はゆる竹野の郡奈具の社に坐す豊宇賀能賣命なり。

わが国での文献としては、これが一番古いところであろう。天女伝説はこのように1,300年以前にも存在していたことが確認できる。「天女の降臨と水浴び」「土地のものの羽衣盗み」「盗んだ者の家での天女の生活」など、モチーフの共通していることから考えて、打吹山伝説とも決して無縁ではないのである。

#### 4. 昔話「天人女房」や謡曲「羽衣」のこと

ところで、この「打吹山の天女」話の淵源を探つてゆくと昔話としての「天人女房」譚に行き着くと共に、類話は世界的な広がりを持っている。

まず、昔話の立場から見てみよう。関敬吾『日本昔話大成』第11巻の「昔話の型」によれば、「天人女房」として次のようにモチーフが整理されている。その中で「打吹山の天女」に該当する部分をゴシックで示しておく。

#### 118 天人女房 (AT400)

- 1, 漁夫(樵夫)が妻を得たいと神に祈願する。
- 2, (a)神の教えによって、(b)助けた動物の援助によって、あるいは(c)偶然に池(川・湖・海辺)で天女(一人または数人)が水浴しているのを発見する。
- 3, 一人の衣をうばい、家につれて帰って妻にする。
- 4, 一人または数人(三人)の子供が生まれる。
- 5, 天女は(a)自身で(b)子供の暗示によって、(c)夫の不注意な口外によって、羽衣を発見する。
- 6, それを着て天女は(a)単独で、または子供を連れて天に帰る。
- 7, 夫は天女が教えた方法によって、植物(竹・瓜)を植え、それをつたって天にのぼる。
- 8, (a)夫は天女の父が課した課題を果たして再び夫婦になる。または(b)失敗して夫婦になれない。

これで分かるように、打吹山の天女では羽衣を発見したところ、そのまま天女は天に帰ってしまって物語は終了する。したがって、多くの類話にあるように、夫が妻である天女を子どもを連れて追いかけて行き、天に至った後、天人の男親などから難題を出されて、それに回答し、成功して再び天女と夫婦になるか、失敗して夫婦になれず、天から追放されるというような後半部分に相当する筋書きは存在していない。ちょうど室町時代の初期、世阿弥(1363~1443)の作ったとされる謡曲「羽衣」と同様のスタイルである。ここでは静岡県清水市の三保の松原が舞台となって漁夫である白龍と天人の間での物語であり、白龍から衣を返してもらった天女は、舞を舞いながら虚空に消えてゆくところで終わっている。

端的に述べれば、打吹山の天女や謡曲「羽衣」は、前半部分が独立して成立した物語といえる。



## 5. 「竹取物語」との関連

ところで、打吹山の天女は、姉妹の子どもから羽衣のありかを聞き出した後、それを羽織るとそのまま天空に舞い上がり、わが子の姉妹の方を振り返りもせず去ってしまう。人間の立場から考えれば、天女はまことに薄情で、親としての愛情のひとつからも感じられない振る舞いである。いったいこれはどうしたことであろうか。

この謎を解く鍵が平安時代初期に作られたとされる「竹取物語」に隠されている。『大辞林』（三省堂）を参考としながら概観しておく。作者成立年ともに未詳。竹取の翁が竹の中から得たかぐや姫の成長と、五人の貴公子や帝の求婚、姫の月世界への昇天を描く。仮名で書かれた最初の物語で、物語の祖とされる<sup>たけとりのおきな</sup>竹取翁の物語、かぐや姫の物語、とあり、だれでも知っている物語であろう。

問題は、天からの使いが来てかぐや姫が天に帰る部分に答えが隠されている。小学館「日本古典文学全集」8巻に収められた『竹取物語』（P. 105～107）から現代語訳で示しておく。

天人のなかの一人に持たせてある箱がある。それには<sup>あまは</sup>天の羽衣がはいつている。また別の箱には<sup>ふ</sup>不死の薬がはいつている。一人の天人がいう、「壺にはいつている御薬をお飲みください。<sup>きん</sup>穢い地上の物をお食べになられたので、ご気分が悪いことでしょう」といって、薬を持ってそばに寄ると、姫はいくらかおなめになって、<sup>すこ</sup>少しの薬を形見として脱いでおく着物につつまうとすると、そこにいる天人がこれをつつませない。天の羽衣を取り出してかぐや姫に着せようとする。そのとき、かぐや姫は、「しばらく待て」という。そして、かぐや姫「天の羽衣を着た人は、心が常の人間のそれと変わってしまうということす。<sup>ひとこと</sup>一言、いっておかなければならぬことがあったのです」といって、手紙を書く。天人は、「おせい」といっていらいらなさる。かぐ

や姫は、「わからぬことをおっしゃるな」といって、はなはだ静かに、<sup>みかど</sup>帝にお手紙をお書きもうしあげる。あわてず落ち着いたようすである。（中略）かぐや姫の手から天人が取って、中將に手渡す。中將が壺を取ったので、天人がかぐや姫にさっと天の羽衣を着せてさしあげると、<sup>おきな</sup>翁を「気の毒だ、不愼だ」と思っていたことも、かぐや姫からぬけ出てしまった。この天の羽衣を着た人は、物思いが消滅してしまうので、そのまま飛ぶ車に乗って、百人ばかりの天人を引きつれて、月の世界へ昇ってしまう。（アンダーラインは筆者）

このように羽衣をまとうことによって、天女は別人ようになってしまい、人間らしい感情をなくしてしまう。つまり、羽衣は実に非情な働きをする力を持っているわけで、打吹山の天女の場合も長い時間を経過しつつもこの系統を引いていると解釈すべきであろうと考えられる。

## 6. 世界の類話との関連

### (1) 日本の事例

さて、この打吹山の天女の系譜は、わが国の昔話「天人女房」につながるが、後半部分が発達している昔話では、婿が難題の回答に失敗し、天の川を隔てて夫婦が離ればなれにさせられ、せめて年に一度、7月7日に会うことが許されるとする七夕由来譚になっているものも多い。例えば、隣県の松江市美保関町万原で筆者が聞いた話で眺めてみよう。語り手は梅木芳子さん（明治37年生）である。ここでは梗概で紹介しておく。

炭焼きおやじが炭を焼いていたら、お姫さんが通りかかり、「どうされるのか」と見ていたら、お姫さんは美しい天の羽衣を堤の側の木の枝に引っかけて水浴びをされる。それで炭焼きおやじさんは羽衣を盗んで家へ帰った。お姫さんは水浴びが終わって羽衣を着ようとしたけれどないので、あの炭焼きおや

じの仕業かなと思って家へ訪ねて行かれた。「今日、水浴びに行ったら、天の羽衣を失ってしまっ、おまえさんが拾ってくださったかと思って聞きに来ました」。しかし、「ない」と言われたので嫁にしてみよう。三年も経つと赤ちゃんが生まれ、テッパチと名をつけた。テッパチは大きくなって自在鉤の中に隠してあった羽衣を見つけたので、おやじさんが炭焼きに行った後、それをお母さんに見せる。その夜、天女は夫にテッパチを連れて天に帰ることを告げ、「おまえさんも来たかったら、門へ朴の木を植えておたので、毎朝、上酒を一斗ずつ、七斗ついでください。そうするとこの朴の木が天に届くので、この木に登って天へ上りなさい」と言い残して空へ上がって見えなくなった。おやじは毎朝起きがけに、上酒を朴の木の根元へついで六日まで続けたものの、早く天へ上がりたくなくて、「一斗つがなくても天へ届いているだろう」と、登りだしたが、一斗足らなかったため朴の木は天に届いていなかった。「テッパチやあ」と呼んだら、テッパチがその声を聞きつけて、「お父さんだ」と、天から長い布をぶらさげて引き上げてあげた。お姫さんも「舅さんがどんな難しいことを言っても『いやだ』とさえ言わなかったら、ここで暮らされる」と教えておいた。朝、舅さんに「今日は何しましょうか」「向こうの粟畑に八斗の種を八反の畑に蒔いてもどりなさい」「はいはい」。おやじはそこへ行って蒔きかけたが、二畝三畝蒔いたら、もう昼になった。しかたがないと思っていたら、後からお姫さんが弁当を持ってきて「この弁当食べている間に、わたしが手伝ってあげるから」と、すぐ八斗の粟を八反の畑に蒔いて帰って行った。

次の日、「今日は昨日蒔いた種を一粒残らず八斗の杵に拾って帰れ」「はいはい」。昼、またお姫さんがカンチクヨウチョウの笛を取り吹かれたら、何千羽という鳥が飛んで来て、八斗の粟の種を拾って取りまとめた。

次の日。「今日は家の下の川を渡った向こうに瓜や西瓜が植えてある。その西瓜や瓜の草を取ってく

れ」「はいはい」。お姫さんはおやじさんに「いくら瓜や西瓜が成っても、決して食べないように」と言っておいたけれども、あまりりっぱに熟れているので、「一つぐらい食っても分かるまい」とおやじが味瓜を一つむしって食べたなら、大水になって後からお姫さんが弁当を持って来られたものの、川が渡られなくなったので、お姫さんは、「おまえさんが瓜を食べたからもう逢われない、しかたがない。月の七日、七日に逢いましょう」と言ったら、「川の音で聞こえんがなあ。七月七日に逢おうよ」と、おやじさんが答えた。それで七夕さんは一年に一べん、七月七日にしか逢うことができぬようになったのだそう。 (昭和45年収録)

これは昔話として示したものであるが、固有名詞を有し、伝説化した説話がわが国にはあちこちに伝えられている。野津龍氏(鳥取大学名誉教授)は『伯州羽衣伝説資料・付日本三大羽衣伝説』(第十七回国民文化祭・とっとり二〇〇二羽衣伝説フェスティバル参考資料・2002年10月 倉吉市・東郷町実行委員会発行)の中で伯耆国(鳥取県)2種類、駿河国(静岡県)5種類、近江国(滋賀県)7種類、丹後国(京都府)2種類の伝説を紹介されているが、三大羽衣伝説とは、鳥取県を除いた静岡、滋賀、京都の三府県の伝説を称し、「打吹山の天女」伝説を持つ鳥取を含めて四大羽衣伝説としておられる。

これらの内容は基本的にモチーフは共通しており、昔話「天人女房」の伝説化したものであることは、推察するに難くないのである。

## (2) 韓国の事例

次に韓国の類話「きこりと天女」を崔仁鶴著『韓国の昔話』(昭和55年・三弥井書店)より紹介しておく。

貧乏なきこりの若者がいた。奉公人として山で柴刈りをするのが日課だったが、ある日、獵師に追われたノロを救い、兄弟の契りを結ぶ。ノロは「王蓮

峰の泉に行き、水浴びする天女の衣を隠しなさい。そうすると隠された天女は嫁になります」と教える。

彼がそこへ行くと玉皇上帝の三人の娘が天から下りてきて水浴びをしていたので、教えられたように秘かに一枚の衣を盗んだので、末娘は天に帰れない。そして二人は結婚し、仲良く暮らし、二人の息子をもうける。

きこりは仲がよいからもう大丈夫だろうと隠しておいた衣を見せると、天女は二人の子どもを両腕に抱えて天に昇ってしまった。きこりは夢中で妻の袖をつかんで天上界に昇ったが、嫁の父に見つかり、家に入れてもらえない。父親は「わしと賭をして勝てばよいが、負ければ天上界から追い出す」と言う。

妻は「わたしの言う通りにすればよい」と慰める。「明日の朝、雄鳥が現れたらお辞儀をして『お父様、お変わりありませんか…』といいなさい」。翌朝そうすると、父親は感心する。まもなくまた鶏がまた現れたが同様にして、二つの難問は解決した。嫁の父親は「最後の問題として、馬に乗って地上界に行くがよい」と言った。妻は「決して馬から下りないように」と注意を与える。

きこりが地上に降りると友だちの家の前を通ることとなった。友だちはきこりを見ると「小豆粥を作っているので食べて行きなさい」と勧める。きこりは小豆粥が大好物なのでつい馬から下りてしまう。馬はあっという間に天に帰ってしまった。

きこりは悔しさの余り泣きながら気が狂って死んでしまい雄鶏になった。それで悲鳴のような「コココー」という鳴き声が聞こえるという。

おおむね関敬吾博士の「天人女房」のタイプに合致しており、わが国の昔話との関連が強い内容といえるが、ただ、韓国の話では雄鳥の鳴き声の由来譚となっており、七夕由来にはなっていない。

### (3) 中国の事例

続いて中国の話を見ておこう。これは人民中国編集部編『中国の民話一〇一選1』（昭和48年10月20

日・平凡社発行）に出ているものである。

むかしむかし、あるところに一人の男の子がおりました。両親はとうに亡くなって、兄夫婦といっしょにくらしていました。兄夫婦はこの弟につらくあたりました。食べものといえば、兄夫婦が食べのこしたもののしかあたえず、着物はぼろぼろの着物をきせ、夜は牛小屋の干し草のなかに寝かせました。この男の子には名前はありませんでした。村の人たちは、この男の子がいつも牛の番をしているところから、<sup>ニュウラン</sup>牛郎とよんでいました。

牛郎は、牛をたいそうかわいがりました。それは牛がひどく牛郎になつき、牛郎にとっては、牛がいちばん親しいものに思われたからです。それに牛はほんとうにもくもくとして、よく働いてくれました。それだけでも、よく牛のめんどろをみてやらなければかわいそうだと、牛郎は思うのでした。牛郎はいつも、いちばんよい草地に牛をつれていって、腹いっぱいやわらかい草を食べさせました。家で干し草をやるときにも、土をよくふるいおとしてからやりました。牛がのどがかわけば、小川の上のほうまでつれていって、きれいな水をのませてやりました。夏は木かげで休ませ、冬は丘の日だまりで、ひなたぼっこをさせました。

一年一年と時はたち、牛郎もだんだん大きくなっていきました。兄夫婦は牛番のほかにも、水くみだの白ひきだの、力仕事はみんな牛郎におしつけました。けれど、待遇はいっこうかわらず、あいかわらず牛郎にはのこりものを食べさせ、ぼろぼろの着物をきせ、壁のない牛小屋に寝かせました。そればかりではありません。親の遺産は兄弟で分けあうのがしきたりですが、兄夫婦は、父親がのこした家やしきや田畑を、ぜんぶわがものにするため、牛郎を家から追いだそうと、前よりもいっそう、つらくあたるようになりました。

ある日、兄は牛郎をよびつけ、さも親切そうな顔をしていました。

「おまえも大きくなったから、もうひとりだちに

なってもいいころだ。それで、おとつあんがのこしてくれた財産も、このへんで分けることにしたい。わしは牛一頭と荷車を一台、おまえに分けてやろう」

兄よめもそばから口を出しました。

「わたしたちは家にあるものなかで、いちばん役に立つものを、おまえさんに分けてあげるんですよ。だから、きょうからおまえさんは、自分一人で家をおもちなさい」

牛郎は骨のある若者でしたから、兄夫婦のつめたいうちを見るといいました。

「そうですか。それでは、わたしはいますぐこの家を出ていきましょう」

牛郎は牛と車をひいて、後もふりむかずに、兄夫婦の家を出ていきました。そして村を出はずれ、林をぬけて、山のふもとにつきました。

その日から、牛郎は山にのぼってたきぎをとり、車にいっぱいになると、車を牛にひかせて市へ出かけ、たきぎを売って食べものを買ってかえりました。そうして夜は、牛を車のそばへ寝かせ、自分は車のうえに寝ました。やがて、牛郎は山のふもとに草ぶきの小屋をたて、小屋のかたわらの荒地をひらいて畑をつくりました。これで牛郎も、どうにか家らしいものがもてたわけです。

ある晩のこと、灯もない暗い小屋にはいっていくと、とつぜん、だれかが、「牛郎」とよびます。村を出ていらい、だれからも声をかけられたことのない牛郎は、おどろいてふりかえりました。すると、これはまたどうしたことでしょう。かすかな星あかりでそれとわかったことですが、牛が口をあけたりとじたりしながら、話しかけているのです。

「あしたの夕方、右手の山をこえていきなされ。山のむこうの林をぬけると、きれいな湖があって、<sup>せんによ</sup> 仙女たちが水あびをしております。仙女たちは、<sup>ころも</sup> 衣をそばの草地にぬぎすてておりますから、そのなかの淡紅色のうすぎぬの衣をとって、林のなかにかくれて待っていなされ。きっと一人の仙女が、衣をかえしてくれと行ってきましょう。その

時、その仙女に、お嫁になってくれとおたのみなされ。仙女はかならず承知してくれましょう。こんないいおりはまたとないこと、かならずともに、ぬからぬようになされ」

牛はそういいましたが、女の子の姿をみただけでも顔を赤らめるほど、うぶでおとなしい牛郎は、びっくりするやら、うれしいやら、とうとうその晩は、まんじりともしませんでした。

あくる日の夕方、牛郎は牛にいわれたとおり、山をこえ、林をぬけて、湖のほとりにやってきました。湖の面は<sup>おもて</sup> いちめんに夕やけをうつして、あかね色にかがやいていました。牛郎はふと娘たちの笑い声を聞きつけて、声のするほうを見ると、なるほど大ぜいの若い娘たちが、湖のなかで水をあびていました。そして、湖のほとりにそってすこしばかりいくと、目の前の草地に、色とりどりの美しい衣が、ぬぎすててありました。はたして淡紅色の衣があったので、牛郎はそれを手にとると、いっさんに林のなかにかけてこみました。

牛郎が林のなかに息をひそめてかくれていると、まもなく、娘たちが岸にあがる気配がしました。

「おそくなってしまったわ。さあ、はやくかえりましょうよ。もし西王母さまが目をさましてしまわれたら、どんなにひどいおしかりをうけるか知れなくてよ」

そのなかの一人が知っているのが聞こえました。そして、しばらくすると、六人の仙女がそれぞれに美しい衣をひるがえしながら、空高くまいあがっていくのが見えました。牛郎がびっくりしてそれに見とれていると、草地のほうから、ふいに若い娘の声が聞こえてきました。

「めったにこれないんだもの、わたし、もっと遊んでいくわ」

どうやらひとりごとのようでしたが、やがて、「あらっ、わたしの着物がな。だれがもっていったのかしら」

とっています。

牛郎はそれを聞くと、あわてて出てきて、顔を赤

らめながらいいました。

「娘さん、心配はいりません、着物はここにありますがよ」

娘は若い男の姿をみると、ぱっと顔を赤らめて、牛郎の手から衣をうけとると、そばの木かげにかけこんでいきました。やがて、娘は着物をきて、木かげから出てきましたが、おぼろな月あかりの下に立った娘の美しさに、牛郎ははとうつむいてしまいました。娘はつやつやとして、ゆたかな黒髪をくしけずりながら、

「あなたはどなたです。どうしてわたしの着物なぞを、とっていかれたのでしょうか」とたずねました。

正直者の牛郎は、そこで、自分の身のうへと、牛にいわれてしたこと*の*いちぶしじゅうを、娘にうちあげました。娘は、この見るからに働きのもの、正直そうな若者を、最初からにくからず思っていました。その話をきいてからはいっそう同情し、心をひきつけられました。二人は草のうえに仲よく腰をおろして、おたがいの身のうえを、こまごまと語りあいました。

実はこの娘は、天上に住む西王母の孫娘で、錦を織るのがじょうずなところから、その名も織女とよばれておりました。毎日、朝晩、西王母は織女の織った錦で空をいろどりました。つまり、わたしたちが毎日見ている朝やけや夕やけが、それなのでした。西王母はとてもやかましやおばあさんで、織女にかたときも休まず機を織らせるばかりでなく、この孫娘の起居振舞に、いちいちもんくをつけました。織女は、地上の人間たちの自由な暮らしを、いつもうらやましがっていました。ほかの仙女たちも、西王母のしつけをひどくきゅうくつがっていたことには変わりはありません。ところがきょう、昼すぎに、西王母は千年のあいだ倉にしまっていたぶどう酒をのみましたが、そのかおりのよさについて飲みすぎ、そのままいすにもたれてねむってしまいました。織女と仲間の六人の仙女は、このときとばかりに天の宮殿をぬけだして、人間界において

きたのでした。そして、そこにきれいな湖があったので、みんなで水あびをしていたのでした。

牛郎は、織女の話聞いていました。

「天上がそんなつまらないところなら、もうかえるのをよしたらどうです。あんたもわしも働く腕をもっているのだから、夫婦になって、仲よくくらすことにしようよ」

織女はしばらく考えたあとでいきました。

「そうね、それじゃあ、わたし、かえらないことにします。いつまでも二人でいっしょにくらしましょう」

二人は手に手をとって、林をぬけ、山をこえて、牛郎の小屋にかえりました。牛はうれしそうに二人をながめ、首をのばして二人の手をなめまわしました。

それからは毎日、牛郎は畑へ出て野良仕事をし、織女は家で機を織ってくらししました。二人ははげましあって働きながら、たのしい月日をおくりました。またたくまに、何年かたち、二人の間には男の子と女の子がうまれました。一家のくらしは、ますますたのしいものになりました。

そんなある日のこと、牛郎がいつものように牛にかいばをやりに行くとき、年とった牛が、目にいっぱい涙をためていました。

「もうわたしは年をとって、お役にたちません。もうおさらばです。わたしが死んだら、わたしの皮をはいで、しまっておいてください。そしてなにかこまったことがおこったときに、わたしの皮をかぶってください……」

牛はそのまま息がたえました。牛郎は牛にいわれたとおり、泣く泣く皮をはいで、たいせつにしまいました。そして牛のしかばねは、夫婦で、小屋のうらの山のふもとに、うめてやりました。

ところでいっぽう、天上では、織女がいなくなつてからは、だれも錦を織るものがないので、朝やけも夕やけも、だんだん色があせてきました。そこで見はりの役人が、西王母のもとへ知らせにやってきました。西王母はおどろいて雲のこしにのり、仙

官をしたがえて、織女の機屋はたやにきてみると、はたして織女の姿は見え、織りかけの錦は、ちりにまみれています。西王母はすっかり腹をたて、家来たちに織女のゆくえをさがさせました。そして、織女といっしょに空の宮殿をぬけだした六人の仙女を、きびしくとりしらべました。仙女たちはせめたてられて、とうとうその日のことを、そっくり白状してしまいました。西王母がさっそく天将を人間界につかわしてしらべさせたところ、織女はすでに牛郎と夫婦になってくらししている、との返事です。それを知った西王母は、まなじりをさいていかり、すぐに織女をつれもどしてこいと、天将を人間界につかわしました。

天将は西王母のいいつけをうけて、南天門を出ると、黒雲にのって、またたくまに牛郎の小屋の前に飛んできました。ちょうどその時、牛郎は野良仕事に出ていました。織女は家で子どものお守りをしていましたが、とつぜん空がくもってきたので、牛郎が外で雨にあいはしないかと、気をもんでいました。そこへおもての戸をはげしくたく音がして、人のおとずれる声があります。織女はびっくりして、子どもをその場に寝かせ、戸をあけてみると、戸口には天将が目をいからせて立っています。天将は、

「西王母さまのいいつけで、そこもとを天につれかえる。すぐにまいられい」

というなり、織女の手をとってつれさろうとします。うえの男の子は、おそろしい形相かたちをした男が母をつれさろうとするのを見て、母にすがりつきました。その子を天将は、じゃけんにつきとばしました。織女は涙にぬれた顔をあげて、たったひとこと、

「はやくお父さんをよんできて」

というまもなく、雲にのせられて、空高くまいあがっていきました。

知らせをうけて牛郎は、家にかけてもどってきましたが、見れば、おさは織りかけの布のうえにおかれたまま、かまどのご飯はふきこぼれています。小さな女の子は、火のつくように泣きわめいておりま

す。牛郎はすぐに天にかけのぼって、織女をつれもどそうと思いましたが、しかし、どうして人間が天にのぼれましょう。その時、牛郎はふと、死んだ牛のいったことを思い出しました。そうだ！ 牛郎はいそいで牛の皮をからだにまとうと、てんびんのかごに子どもを一人ずつ入れ、それをかついで外へかかれました。

はたして、牛郎のからだはひとりで、ふわりと空にまいあがりました。まもなく耳のはたで、ビュービューと風の音が聞こえてきます。いくほどに飛ぶほどに、速度はますますくわわり、やがて、織女と天将ののった雲が見えてきました。牛郎は声をかざりに妻をよび、二人の子どもも母をよびました。

南天門はもう目の前でした。西王母は大ぜいの仙官をしたがえ、おそろしい顔つきをして、門のそばで天将のかえりをまっていたましたが、織女の姿を見るなり、すぐにもかの女を罰しようとしてしました。が、ふと見ると、牛郎がおいついてきて、織女の衣のすそをとらえ、二人の子どもも大声をあげて母の名をよんでいます。西王母は天将に命じて、織女を牛郎からひきはなさせたうえ、頭からかんざしをぬいて、さっと目の前の空間に、一本の線をひきました。その線は、たちまち一本の大きな川になりました。川はいちめに波をたたえて、とうとうと流れていきます。この川がいわゆる天の川あまの川です。牛郎は川のこちらがわへ、織女は川のむこうがわへ、遠くへだてられてしまいました。

こうして織女は天宮につれもどされましたが、どうしても牛郎といっしょにくらしたいといって、ききませんでした。だれがなんといつてなだめても、聞きいれません。これにはおばあさんの西王母も、ついにかぶとをぬぎ、しかたなく一年に一度、毎年七月七日の日をかざって、織女と牛郎が会うのをゆるすことにしました。その日には、たくさんのかささぎが、天の川に橋をかけます。牛郎と織女はその橋をわたって、たのしいひと時をすごすのでした。

夏の夜空をあおぐと、天の川の両がわに、ひととき

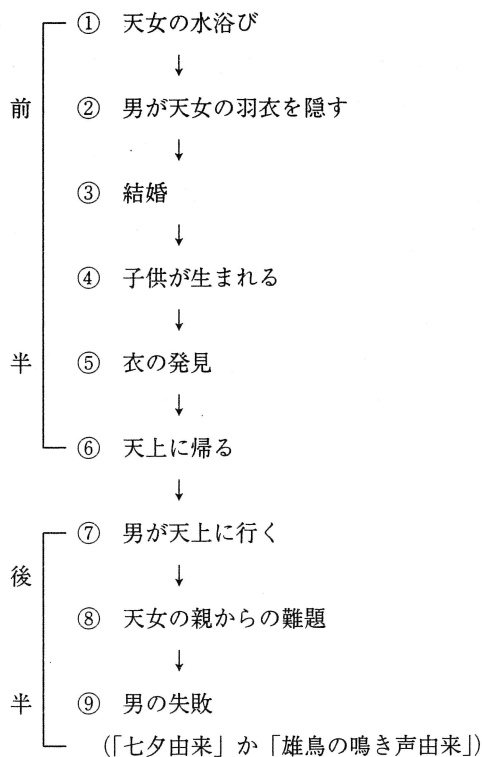
わ美しく光る二つの星が見えます。あれが牛郎と織女です。毎年、七夕たなばたの夜ともなれば、地上にはほとんどかささぎがいなくなりますが、それはかささぎたちが、天の川に橋をかけにいくからです。七夕の晩は、ぶどうだなのしたにすわって、じっと耳をすますと、牛郎と織女がたのしそうに語りあっているのが、聞こえてくるといわれています。

(漢族)

七夕の由来を説く点では、わが国の事例と同様である。

#### (4) 三国の説話を考える

このように中国とわが国の話には、七夕由来を説くという共通点があるが、韓国については、雄鳥の鳴き声説明譚となっており、ここだけは異なっている。しかしながら、基本的な道筋は共通しているといつてよいのではなかろうか。それを図式化してみると次のようになる。



ただ、打吹山の天女伝説では、①から⑥までの前

半部まで、⑦以降の後半部は伝承の過程で脱落していったものであろうか存在しないことは、前に触れておいた。

#### 6. まとめに代えて

この羽衣伝説は、アジアのみならず世界に広がっている<sup>(註1)</sup>。ロシア、タイ、ベトナム、ミャンマー、インド、パキスタン、インドネシア、フィリピン、ドイツ、カナダ、アメリカなどまだあるようである。そして天から降りてくる姿が、白鳥(ロシア、インドネシア、ドイツ)、ハト(シベリア地方)、インコ(インドネシア)、ガチョウ(カナダ、アメリカ)、雁(アメリカ)など多彩であり、中には魚のマグロ(パプア)といった天上界ならぬ海の世界からの来訪者だったりするが、筋書きはほぼ共通している。

つまり、天女が天に帰って行った後、男も後を追いかけて、天で妻の親が男に難題を出し、それを解決して二人は幸せになったり、逆に破局を迎えたりと、結果が反対になっているものもある。

また、日本の神話に似たモチーフ、例えばオオクニヌシが根の国で、スセリヒメの父、スサノオに試されて数々の試練に遭うが、それとそっくりの話<sup>(註2)</sup>があったりと、なかなかバライテーに富んでいる。

しかし、本稿では基本的に「打吹山天女」に視点を置いて、類話を考察するのがねらいであるため、これ以上の詮索は別の機会にすることにしたい。

ともかく、地元で独自に発達している「打吹山の天女」伝説も、こうして類話を眺めることによって、人類の歴史と共に、世界に存在する仲間の一つとして、その前半部分が独立した形で定着していった地名由来譚であることが分かるのである。

以上

#### 【参考】

松岡布政『伯耆民談記』寛保2年(1742)より

「長谷寺」(倉吉市)の項の関係分から。

此山を打吹山と云ふこと、山の伝記に曰く、往古此山下に村落あり、神坂と号く。側に井あり、上世に天僊あり、民家の婦女に化して、此井に衣を浴洗して、傍の石上に乾す。時に村夫是を過ぐるに、衣の美しさを見て、不思議に思ひ、之をとりて隠し、篋に欵め、関鎖を密にす。天女衣なくして天上すること叶はずして屢是を請へどあたはず。侶誘せられて遂に夫婦と成り二子を生ず。此子成長して後、父に代りて家事を行ふ。時に天女其子を欺いて衣を乞ふ。子供は其事の起りを知らず、関鎖を開いて衣を与ふ。女やがて是を服し、即時に縹緲として杳冥に昇り去る。子供鳴き咽で追ふと雖も翅なければ及ぶ事なし。蓋し天女は素より伎楽を好めば、思慕の余りに、此山に登り祭奠を供し、鐘鼓管籥の楽器を列ねて、大に音芸を起し、之を招くと云へり。彼の二子鐘鼓を打ち、管籥を吹き鳴らせし山なる故、打吹山と称すとかや。当山には是の如く伝来すれども、羽衣山の伝には、天妃羽衣石の山に降臨し、後に天上の地は神坂にして、子供音楽をなせしは此山なりと云ふ。両説異なりと雖も、寔に上世の沙汰にして山秘の伝なるべし。

(注1)

稲田浩二編『日本昔話通観』研究篇I (同朋舎)  
p 264~278を参考にした。

(注2)

中国・ミャオ族の話の概要を参考までに挙げておく。

男が池で水浴する七人の天女を見つけて一番美しい羽を隠すと、末娘が飛べなくなって男の妻となり、二人の子を生む。妻は子供に教えられて羽を見つけると、羽を二本抜いて子供に渡し、「大きくなったら来い」と言って羽をつけて天へ昇る。成長した兄弟が母に会いにいて途中で老人の家に泊まり、教えられたとおりに道をふさぐミミズ、蛾、蛇を木ではさんで捨てながら進む(古事記神話で大国主命が素戔鳴尊から、蛇やムカデの部屋で受けた試練に重なる)。それでみみずや蛾の腰は細く、蛇に白いまだら模様がついた。つぎに祈祷師の家に泊まると、鶯が「二人をもてなすために殺される」と鳴くので、兄弟は道を教えてもらって助けてやる。兄弟は言うとおりに雲の上の馬に乗って会いにいき、母は二人を天に連れていく。天女の父が「隠れんぼをしよう」と言って水牛、馬に化けると、兄弟は母に教えられて見つけ、母が兄弟を腰掛け、ひしゃくに変えると、父は見つけられない。つぎに木を切って倒すと、兄弟は母に教えられて白をかぶって助かる。つぎに「焼き畑を作れ」「粟をまけ」「粟を一粒残らず集めよ」と命じると、兄弟はそのつど母に教えられて果たす。焼き畑を作るときには焼き殺されそうになるが、母親の助言で逃れる。(古事記神話では大国主命が、素戔鳴尊に野原に放たれた矢を捜しに行つて焼き殺されようとしたモチーフに重なる)。三人は父に許されて地上へ帰り、夫とともに幸せに暮らした。

「天人女房とふたりの子ども」—村松一弥編訳『苗族民話集』p. 185~199 (東洋文庫1974平凡社)—